

設問(8) 正解 ②

みずすまし構想ではなく西の湖・伊庭内湖流域田園水循環マスタープラン

設問(9) 正解 ③

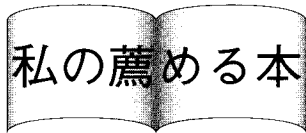
150 W ではなく 350 W

設問(10) 正解 ①

②集落移転が実施されることはないではなく、集落移転が実施されることもありうる

③財政の持続性ではなく生物多様性の持続性

④「むらおさめ」ではなく「積極的な撤退」



春の小川の淡水魚—その生息場と保全

水谷正一・森 淳編著 学報社 2009年1月発行
B5判 190ページ 2,835円(税込)



社会基盤整備に、生産性向上と生態系保全の両立が求められる時代になった。つい20年前までは、「営農活動は遊びごとではない」などと言われて、受け入れられることはまずなかった。1989年に「農業水利施設高度利用事業」(数年後に「農村水環境整備事業」に名称変更)が創設されたのを嚆矢として、2001年には土地改良法が改正されて同法第1条(目的及び原則)で「環境との調和に配慮しつつ」とうたわれ、2003年には「新・生物多様性国家戦略」が発表され、用水路や水田などの二次的自然における生物種の著しい減少傾向に警鐘が鳴らされた。世論に押されて行政も、冒頭に述べた2つの目的の両立を求め出したのである。

こうした背景の下、宇都宮大学の水谷正一氏を中心とした研究グループは、水田とそれに接続する河川・水路の生態系(「水田生態系」)調査を本格的に開始した。

調査開始当時は、人為的な管理下に置かれ、かつ錯綜したシステムをなしている河川—水路—水田を対象とする生態学的研究は少なく、また水産業の対象となっていない水田水域の淡水魚は「ザッコ(雑魚)」とひとくくりで呼ばれ、その生態はほとんど未解明であった。そのようないわば空白に近い研究領域において、2001年度から2008年度

にかけて4本の文科省科学研究費による系統的調査から多くの優れた博士論文を積み上げ、実証性とともには系性にも富む著書の出版に至った編著者らに、敬意を表したい。

まず表紙を含む装丁が魅力的である。『春の小川の淡水魚』という優雅な書名にふさわしく、じんぐうじ香子氏の淡水画によるカバーイラストデザインは秀逸で、本文を期待させること大である。

巻頭で「春の小川とは、どんな川なのか」と問いかける水谷正一氏。かつての自宅の近くを流れる1mほどの幅の「どぶ川」(当時)が、名にし負う「春の小川」だったと知るのははるか後、どぶ川が暗渠化されてからだった、という。古代より水田耕作を可能とした小川(用水路)への愛情に満ちたこの第1章は、読者を続く6つの章に誘う良質なアペリティブといつてよい。

第2章から第5章では、新進気鋭の研究者らによる、水田水域を生息場とする代表的な淡水魚の生活環とそれを成立させる生息場についての、実証的で詳細かつダイナミックな記述が続く。そして第6章では、淡水魚のDNA解析による遺伝的集団構造が、第7章では、窒素・炭素安定同位体比をツールとする水田水域およびその周辺の動植物の食物連鎖構造が、それぞれ謎解きのように語られ、興味深い。

これらの研究を構成するデータ収集の苦労は並大抵なものではなく、悪天候をも顧みず、一日も欠かさずとにかく現場に向かう彼らの姿を知っているだけに、読んでいて頭が下がる。水田水域を生息場とする淡水魚たちの生き様が、繰り返して読者に向かって生き生きと投影され、日本の水田こそ「生産性と環境」という二律背反的な命題を止揚する優れたビオトープとなりうる、という確信にまで読者を導くだろう。学会員必読の書といつてよいであろう。

東京農工大学教授、大学院連合農学研究科長 千賀裕太郎